



開拓記念館には、新十津川町指定文化財を展示していますので、紹介します。

## 新十津川町開拓記念館 展示品紹介

昭和55年8月の開館から、新十津川町開拓記念館は42年目を迎えました。記念館は、開拓移住民の偉業をたたえ、歴史を伝える郷土資料館です。

### 新十津川獅子神楽

(町無形民俗文化財指定)

第1号 昭和58年指定

新十津川獅子神楽は、神社例大祭に合わせて、神社と役場前を中心に町内各地で演舞が行われます。また、小学校では、特別クラブが獅子神楽保存会から指導を受けて練習を行い、ふるさとまつりや学内での各種行事で発表しています。この獅子神楽は、頭(獅子の先頭部)1人、かや(頭以降の中役)4人、踊子1人以上と大掛かりなもので、ほかに太鼓、笛などの演奏も入ります。

開拓記念館には、頭とかやを展示しています。

獅子神楽はいつ、どこから何のために伝えられたのか？

・『新十津川百年史』には…

「明治41年(1908年)、日露戦争後の人心退廃の風潮を憂う中川三之丞、山本十吉、高桑伝次郎ら富山県出身者が、青年たちに健全な娯楽を授けるとともに、併せて村祭りにも寄与しようとして獅子神楽の普及を計画し、同郷の先輩中川与七郎・高桑清作・中川吉左衛門・中川吉之丞・中川与助・高桑長吉・石本国蔵らの賛成を得て獅

子神楽会を設立した。会長に高桑長吉を推し、寄付金を募集したところ135円(※1)の資金が集まった。山本十吉・斎藤九左衛門を師匠として、早速青年たちに獅子舞を指導教授し、一方、高桑伝次郎は用具調達のため郷里の富山県利賀村(※2) 栃原へ赴き、獅子頭(かしろ)、かや、かりさん(袴)、前かけなどを買求めて帰村し、九月には玉置神社(現新十津川神社)の秋祭りで初の発表を行った。

以来四区(※3)の青年たちによって守り伝えられ、毎年玉置神社の大祭には、その舞いを奉納し、近隣市町村に例のない伝統と特色ある郷土芸能として名声を博した。」

と記載されています。

※1 明治41年の135円は、

企業物価指数で換算すると、現在の約60万円に相当するが、高桑伝次郎氏のように獅子頭、かや、袴、前掛けなど一式を現在そろえると、

300万円以上を必要とする。

※2 富山県利賀村：現在の富山県南砺市

※3 四区：新十津川の古い地域区分名。現在の和和区と橋本区にまたがり、旧里見地区と宮前地区を指す。



『獅子神楽七十五年記念誌』(昭和55年刊)も加えて考察すると、次の4点が分かります。

①明治41年に、富山県出身者が郷里の利賀村から伝えた。

②その富山県出身者は、旧四区で困難とされていた場所ので稲作に成功した複数の方々であった。

③日露戦争後の青年への娯楽提供（健全育成）と村祭りへの寄与を目的にしていた。

④故郷への思いと同郷の団結が、獅子神楽を伝えることを後押しした。



獅子神楽は子どもたちに大人気！

### 玉置神社奉祀之景 (町有形文化財指定)

第2号 平成14年指定

奉納絵馬は、上徳富（現 大和区）のシスン島（石狩川と三日月湖に囲まれた部分）に社殿を建てて、旧郷玉置神社の分霊を奉安した時の様子を岸尾森直氏が、明治27年6月24日に奉納したもので、カンバスに油絵で描かれています。この時の玉置神社は、現在の新十津川神社に当たります。

・『新十津川百年史』には…

「幟が林立し、露店が設けられ、村民が撃剣、射撃、踊りなどに興じている有様や、家屋の配置、渡船の情景など、ようやく落ち着いた新村の状況を見ることが出来ます。」

と記載されています。

開拓当初の様子を伝える貴重なものとして、この絵の複製品が北海道博物館に展示されています。

### 絵馬から読み取れること

絵馬をよく見ると「？」と思う箇所があります。

①シスン島の横に、2 km以上離れている徳富川が流れている。どうして徳富川を近くに描いたの

か？

②『新十津川百年史』に盆踊りがあるが、どうしてヤグラの下にいる人が並んでいないのか？白い点々が描かれていることから、餅まきをしているように見える。

③十津川郷での水害に遭ってから5年後に、高さが低い地点に神社を置く。

この後、明治31年には水害で神社が水に浸かり、明治33年には現在の場所に移る。どうしても浸水リスクがある地区に神社を建てたのか？

今となっては、正確な答えは分かりません。

### 開拓記念館に お越しください

開拓記念館に町外

から見学に来る方から、よく「獅子神楽は奈良県十津川から伝わったものでないんだ！」との感想を聞きます。

また、絵馬を見ていると「この



玉置神社奉祀之景

絵はどこまで本当の景色を描いているのだろうか？」と疑問が湧いてきます。

皆さんも開拓記念館で「！」や「？」を見つけてませんか。